

2023/06/10

6月16-18日にオンラインで開催された日本比較教育学会第59回大会において、研究成果を発表しました。

谷口 京子

マラウイのコミュニティ・チャイルドケア・センターの運営

—無給のボランティア保育者に着目して—

要旨

本研究は、近年、マラウイで拡充しているコミュニティ・チャイルドケア・センター(Community-Based Childcare Center: CBCC、以下、CBCC)の運営について、無給のボランティア保育者に着目し、明らかにすることである。

就学前教育は、2000年の万人のための教育ダカール目標、更に、2015年の持続可能な開発目標に掲げられ、質の高い施設へのアクセスの向上が求められている。乳児期からの早期介入により、貧困削減、不平等の緩和、社会的・経済的コストの削減に繋がるとされている。また、非認知能力の育成は、幼児期が重要であり、その効果は、特に、貧困層に高いと示されている(Heckman & Savelyev, 2012)。さらに、就学前教育は、初等教育への準備段階であり、初等教育の低学年における留年や退学の減少や初等教育への学業成績への影響が挙げられている。

本研究の対象国であるマラウイにおける就学前教育施設は、2007年7,801施設であったが、2018年12,220施設となり、非常に増加傾向にある。就学前施設は無償のCBCCと有償の施設に大別される。CBCCは、就学前教育施設の7割を占める。CBCCは、コミュニティに設置と運営が任されている。設置要件は、場所と保育者の確保の2つである。保育者になるための条件は特に定まっていない。政府は、CBCCの質の向上のために、保育者にトレーニングを実施しており、2021年現在でトレーニングを受けた保育者は47.3%となっている(MoGCDSW, 2021)。

本研究の調査は、2021年10月と2022年9月に実施した。調査対象は、マラウイ北部のンカタベイ県のCBCC10施設であった。保育者24名、子ども保護員3名、CBCC委員会の役員5名に半構造インタビュー調査を実施し、CBCCの設立から現在までの運営、子どもや保育者の状況、コミュニティと保護者の関わり、政府の介入について調査した。多くの施設では、コミュニティとの関わりは箕臼で、保育者が運営の中核を担っていた。しかし、保育者は無給のボランティアであった。施設の運営について、インタビュー内容をコーディングとカテゴリ化することにより、分析した。第一に、全ての保育者は、「子どもが好きである」、

「コミュニティのためである」と考えていた。保育者になったきっかけとして、「子どもたちがコミュニティ内で遊んでいる状況を見て、子どもたちを集めて、自宅や木の下でお世話を始めた」。それが、次第に、「アルファベットや数字などを教えて始めた」という流れであり、自分たちのコミュニティの子どもは、自分たちで育てるという意識が高かった。第二に、就学前教育の重要性や小学校との繋がりが大切であると考えていた。就学前教育へのアクセスはまだ約半数であるが、保育者は小学校に入る前に準備をしておくことが大切であると考えていた。第三に、保育者の教育水準と過去の経験であった。保育者は、コミュニティの中では学歴が高く、初等学校や前期中等学校を修了していた。しかし、初等教育の教員資格は持っておらず、小学校で働くことはできなかった。一方、自分が今まで経験してきた知識で保育や教育ができると考えていた。第四に、各施設では保育者が2~4名であり、保育者同士で助け合い、運営していた。多くの施設では、設立当時からの保育者が中心となって運営していたが、近年、高齢になってきたため、若手の保育者が手伝っていた。若手の保育者は、最初に創めた保育者の活動に賞賛し、サポートをしたいという思いから始めていた。最後に、施設の柔軟な運営であった。コミュニティの無償の施設で無給のボランティア保育者ということで、都合に応じて休日にするのが容易であった。また、運営時間が午前中の2~3時間と短いことで保育者の負担が少なかった。施設は、保育者の慈善活動で運営されていた。